

保育者になったころ (3)

熱い想い

大多和 檀

昭和四十二年四月、東京都港区立N幼稚園で、私は幼稚園の先生のスタートを切りました。「いま、ここで、新しく」「保育は、先生と子どもの信頼関係」「先生と子どもが見えない糸でしっかりとつながれば子どもは何でもできる」「心がつながることが一番大事。それには、子どもたちと遊び、かかわりながら互いに知っていく」「遊びこそが大切」とい

う想いを胸に、朝から帰りまで、子どもたちとひたすら遊ぶ日々でした。

「幼稚園の先生になろう！」まで

①周郷博先生との出会い

私は、高校を卒業後、ある大学に併設された二年制の幼稚園教員養成課程（幼教）に入学しました。

私にとっては、女子だけの学校生活は初めてで、雰囲気になじめませんでした。でも、周郷博先生との出会いは、そんな私を大きく変えました。

周郷先生は最初の授業で、シモーヌ・ベージュ（若くして亡くなった、ユダヤ人。哲学者）の話をしてくださいました。「この人はまだまだ硬いつぼみそのまま死んでいる。だからとってもいい顔をしてるんだよ」の言葉に、その場で周りを見渡しました。この時、「確かに女もいい顔をしている」「女もいいかもしれない」という思いが浮かび、女子ばかりの学校もいいと思えるようになったのです。

また、私は小さいころから、「人が死ぬということか」「何のために勉強するのか」と、ずっと不思議に思っていました。周郷先生は体調が悪かったのか、いつも倒れそうになりながら遅れて講義室に入ってきたが、講義室に入るなり、黒板に「人が生きるってどういうことだろ

う」と書いたのです。「やっとういうことが話せる人がここにいらした」と、心の底から思いました。そして、ここから私の学びを始めることができました。

② 附属幼稚園での子どもたちとの出会い

このころの私は、「女の人ってどうしてこんなに話を通じないのか」「どう人とかかわれるか」と迷っていた時期でもありました。

幼教では、週に一日、大学の附属幼稚園に配属されました。そこで、心が揺さぶられた出来事が二つありました。

一つ目の出来事です。三歳児のY子ちゃんは本当にいい子だけれど、顔の造作としてはあまりめだたない女の子。Tくんはとてもハンサムで石坂浩二（そのころの美男子の代表的な俳優）似の五歳児。この二人はとても仲良しでした。ある日、「僕たち

大きくなったらお船に乗って、アメリカに行くんだよね」と言っているのを聞きました。

「えーっ、すごいな。外見でなく、子どものほうが、本当のところを見るんだ」と感動しました。単なる子どもの言葉、というのではなく、青春時代を過ごしている私の心にも、とても響いたのでした。

もう一つは、三歳児のAくんBくんの間に起こったことです。Aくんは一人で汽車をつなげていました。それはそれは、とても楽しそうでした。その様子をジーンッと見ているBくんがいました。「入れて」と言いませんが、「ほくもやりたいな」という顔をしていました。Bくんに気がついたのです。う。AくんはBくんに、汽車を一つ渡して、「つなげていいよ」とひとこと言ったのです。Bくんの顔はにこにこ輝いていました。

「(一緒に)やろう」ではないのです。「何てすごいんだ。人とかかわっていく基(もと)が三歳児にあ

るんだ」。人とかかわりを学べるのが幼稚園。私も子どもとかかわりながら学ぼう、幼稚園の先生になろうと思ったのです。

熱い想いをもつて

N幼稚園は、四歳児クラスと五歳児クラスがそれぞれ二クラスずつの幼稚園でした。三十代の先生が二人、四十代の先生が一人、そして新卒の私の四人がクラス担任です。主任は四十代で私の赴任と同時にN幼稚園に異動してきた方でした。

三人は、決まった時間になると全員保育室に入っていきます。私は、一人ひとりが違うのだから」と、一斉に保育室に入って何かをすることはありませんでした。

母親にとっては、新卒というだけでも不安なのに、周りの先生たちとは全く違う保育をしていたのですから、なおさら不安です。母親たちから「幼稚

園では先生と子どもが集まって、歌を教わったり、折紙を教わったり……。もっとそういうことをやらな
いんですか。こんなにずっと遊んでいて、小学校に
行って大丈夫ですか」という話が出てきました。

私は「大丈夫です」と言い切りました。そして、

「子どもは、『これが大好き』と言って目を輝かせて
遊んでほしいし、その遊びの中で、その子が今、絵
を描きたいんだな、というなら絵の用意をするし、
その子が歌が歌いたいんだな、と思えば一緒に歌も
歌う。一日にいつべんも集まらないわけではなく、
お弁当の時は、『お弁当だから片づけしようね』と
言っています。お帰り前には、『もうお帰りの時間
だから片づけて集まろうね』と言って、その時には
話もしている。一対四十人で、ということもやって
います。私は二年間かけてやりますから、もう少し
見ててください」と話しました。

当時の親御さんは今の親御さんとは違っていたよ

うに思います。「幼稚園のことは幼稚園にお任せし
ましよう」と言ってくれたのです。よくこんな二十
歳そこそこの小娘に、自分の大事な子どもを委ねて
くれたものだと、今振り返っても、ごめんなさい、
ありがとうの思いでいっぱいになります。

後日談ですが、卒園を前にして、ある母親が、
「あんなにゴチャゴチャしているように見えても、
子どもは幼稚園が大好きでした。何か魅力があった
んでしょう。親にとっては我が子が幼稚園へ行きたく
いって楽しく行ってくれるのが一番の幸せで
す」と話してくださいました。この時は本当にうれ
しかったです。

また、「私たち、先生のやり方は大丈夫かと思っ
ていた。でも小学校へ行ったら、ちゃんと座ってお
話を聞いていました」と報告してくれる母親もいま
ました。あの時の母親たちには、本当に感謝していま
す。

主任の先生に支えられて

母親たちは、私の迫力に圧倒されたのかもしれないですし、ああいうふうに言っているからしょうがないかなと思つたのかもしれない。学級懇談会で初めに聞かれた後は、母親からの不満が、私の耳に直接入ってきた記憶はありません。主任がすべて受け止めてくれていたのです。『お話を聞く態度をどういうふうに養つていくのか』『絵をどんなふうに教えているのか』は私から聞いておきましょう」と、いう具合です。

主任は、常に私に「あなたは どうして そういうことをしているの?」「どうして?」「どうして?」と聞いてくれました。そのたびに、私は「幼稚園教育は、何かを教えるところではない。子どもたちが、自分以外の他人がいるということをやつて受け入れて、しかも全くの他人と一緒にいて楽しいね、

自分と違うけれどお友達といると楽しい、ひとりでも楽しいこともある、明日も幼稚園へ行きたいな、と子どもが思うことが幼児教育と思つています」と言っていました。

主任は、ほかの先生からの忠告にも「大多和さんはすごく想いがあるみたいだから、もう少し見てあげましょう」と言ってくれていたと、後になって知りました。

私のクラスの子どもたちは、遊戯室、保育室、庭と自由に遊び回っていましたから、「あちらこちらにいる子どもをどうやってみるの」と聞かれたこともありました。この時は、「大丈夫です。あの子と私はちゃんと結ばれているから、何かがあつたって行つたらすぐに言いに来てくれる、信頼関係で結ばれているから大丈夫なんです」と、ここでも迷いもなく言い切っていました。「若さ」ですね。

話し合える仲間を得て

二年目の四月。私以外の三人の担任がそろって異動していきました。担任は若い保育者ばかりになりました。この後、数年間は、この四人のメンバーで「保育者は、子どもに何ができて何をしてあげられるのか」を常に話し、それぞれの意見も言い合い、熱い日々でした。



主任は、自由にやらせてくれたというわけではありませぬ。ことあるごとに、「私のような教育を受けたものに、あなたたちの考えは理解できないから、私にわかるように話してください」と言っていました。それが良かった

のです。自分の思いを伝えるために必死になりました。とても勉強になったと思います。自分を振り返らなければならなかったからです。この主任は、「自分の考えとは違い過ぎてびっくりすることが多かった。しかも、何の迷いもなく信念をもっている。『どうして?』と、そのたびに聞いていたが、説明されて、そういう保育もあるんだ、と思った」と、後になって話してくれました。

最もびっくりさせたのは、ある年の誕生会に、「幼稚園の屋根の上におにぎりを食べたい」ということだったかもしれません。誕生会のおやつは、子どもたちと一緒にいろいろ作っていましたが、卒園間近のころ、子どもたちは、小学校入学を楽しみにして歌う童謡から思いついたのです。私も、小さいころ、屋根の上のつた時、空が広く広く見え、その気持ちをおこの時も覚えていたので、主任に話しました。

主任には、「幼稚園教育課程の中で、屋根の上に乗っておにぎりを食べるなんて入っていない。それやるっていうのはどういうこと」と厳しく言われました。それに対して、その時の子どもたちの生活の流れや、どういうところでこの希望が出てきたのかについてや、どうして「おにぎり」なのかなどを話しました。そして、「それは子どもたちの夢で、私たち大人は子どもの夢をかなえてあげたい。それが実現したら子どもたちはどんなにうれしく思うか」と。

ついに、主任から「けが人を出したら私たちはクビよ」と言われながらも、計画を進めることができました。子どもたちとは、おにぎりが転がっても絶対に立ち上がらないことを約束し、どうやって屋根に上るか、降りるかも何度も練習して…。当日は、皆、慎重に、慎重に上りました。子どもたちにも、とても楽しい思い出になり、高校生になった時、

「楽しかったよね、屋根の上でおにぎり食べて」「弟の時はどうしてなかったの?」「先生、気持ちよかったね。でも『いいですよ』といってもらうためには大変だったな」と話していました。

最近保育者になった方へ

「失敗なんてしてもいい。最後の責任は私が取ります。それが園長なんだから。それよりも、もっと『私こういう保育がやりたい』というのをやるんだよ。失敗は当たり前。最初からうまくなんていかない。でも、自分はこういう思いがあるんです、と言えることが大事」と、いつもみんなに言っています。

子どもたちはとても健気です。「この人があなたの先生よ」と言われれば、無条件で受け入れてくれます。だからこそ、その思いに、どんなことがあっても応えてあげたいと思いませんか、心を込めて。

(横浜市 まこと幼稚園)